

§ 2-11 古代壁画の顔料と壁土

わが国における古代壁画といえば、まず法隆寺五重塔、金堂の壁画をあげることができる。その他、高松塚古墳の壁画、九州の装飾古墳がある。そして、鳥取県上淀麿寺出土の壁画片がある。写真2-10は、法隆寺金堂第2号壁（半跏形菩薩像）、写真2-11は高松塚古墳の壁画を示す。

1934年、法隆寺伽藍の大修理が始まった。金堂の解体にともなう壁画の取り外しの前に模写をすることになった。この時、顔料の分析調査も実施した。顔料分析を担当した山崎一雄は、金堂壁画には、白・



写真2-10 法隆寺金堂第2号壁
(半跏形菩薩像部分図)



写真2-11 高松塚古墳壁画
(部分図)

赤・黄・緑・青・紫・黒色の7系統11種類の顔料が使用されていることを確認した¹⁶⁾。白色系には、白土（珪酸アルミニウム）・胡粉（炭酸カルシウム）の2種の顔料を同定している。以下、赤色系では朱（硫化水銀）・鉛丹（四三酸化鉛）・ベンガラ（酸化鉄）の3種、黄色系では黄土（含水酸化鉄）・密陀僧（一酸化鉛）の2種、緑系は岩緑青（塩基性炭酸銅）、青色系では岩群青（塩基性炭酸銅）、紫色系では明白ではないが、無機顔料の混合物である。黒色系では墨（炭素）が使用されていることを確認している。

法隆寺金堂壁画の焼損から40年を経た、1990年、鳥取県上淀麿寺から数千点にのぼる仏教彩色壁画（口絵写真③参照）および壁体が出土した。それまでは日本の古代仏教壁画の遺例は法隆寺金堂壁画しかなく、これは数少ない壁画資料の発見となった。しかし寺院は火災に遭っており、顔料のほとんどは変色、あるいは焼失していた。

分析の結果、赤色系の顔料が塗られていた部分からは、鉄とごくわずかの鉛成分を検出したので、この部分にはベンガラ（酸化鉄）や鉛丹（四三酸化鉛）があったと思われる。また、壁画のあちこちから銅成分を検出した。これは緑青（孔雀石）か群青（藍銅鉱）のいずれかで彩色していたことを意味する。化学分析の結果だけでは、それ以上の結論はでてこない。ここで美術史の立場から補強することになる。法隆寺の壁画や高松塚古墳の壁画などを参考にした。たとえば、草木には緑色や青色を、人物画の裳には赤色にくわえて緑色や青色を使用している。その状況を合わせ考えると、当初の上淀麿寺の壁画には、白・赤・黄・緑・青・黒など6系統の顔料で彩色していた状況を復原することができた。

九州における装飾古墳の顔料については、福岡県・大分県・佐賀県・熊本県に所在する装飾古墳39基について調べたもので、使用された顔料は、赤色系が圧倒的に多く、他に白・黒・緑・黄色・青の6種類である。表2-3は、山崎一雄¹⁶⁾の表に、上淀麿寺出土壁画顔料の分析結果を追加したものである。ただし、上淀麿寺の壁画の場合、たとえば赤色顔料の朱は分析をして確認したわけではない。実は、熱を